

有田川町内における学校循環型授業研究の継続的発展に向けて

研究代表者：宮橋 小百合（和歌山大学）

共同研究者：南垣内 智宏（和歌山大学）

柏野 貴之（和歌山大学）

有田川町立藤並小学校 校長 川岸 俊夫

教頭 安井 健晃 教諭 嶋田 成暁

有田川町立鳥屋城小学校 校長 坂本 利文

教諭 九鬼 正志

有田川町立石垣中学校 校長 池下 勝也

はじめに

筆者らは、2019年から有田川町内の小学校3校と連携し、「インストラクショナル・ラウンズ（以下、IR）」の手法を用いた授業研究を行ってきた（廣瀬ら，2019；宮橋ら，2021）。2022年にはさらに発展させ、有田川町内の小学校2校と中学校1校で研究授業を順に実施し、それぞれの学校に互いに訪問してIRの手法を用いて研究授業を行った。有田川町内でも、学校の小規模校化が進み、1学年1学級規模の学校が増加することで、教師同士で教材研究し合う機会が減り、授業を参観し合う機会も限られてしまう。このIRの取組により、町全体を見通した学校間連携を促進し、現職教育の活性化や若手教員の育成が促進されることを本研究の目的としている。

1. 調査実施日と調査協力者

2022年11月に実施したIR授業研究では、3校の協力校それぞれ授業者1～2人、3校のうち2小学校から、授業を参観・分析するIRメンバーを推薦してもらった。

また、手法の特徴上、参観・分析する人数が複数名必要となるため、和歌山大学教職大学院の現職院生に参加協力を依頼した。現職院生10名全員が1～2校ずつ参加できるようになったため、大学院の実習科目として位置づけることになった。そのため、柏野貴之特任教授と南垣内智弘教授が同行し、IRの実施をサポートしてくれた。

表1：3校のIR実施日とメンバー

日時	学校	参観授業	IRメンバー
11/7 (月)	鳥屋城 小学校	4年生国語 6年生理科	@九鬼（鳥屋城） ・嶋田（藤並） ・現職院生
11/8 (火)	藤並小 学校	4年生国語	@嶋田（藤並） ・九鬼（鳥屋城） ・現職院生
11/14 (月)	石垣中 学校	2年生理科	・九鬼（鳥屋城） ・嶋田（藤並） ・現職院生

各校の授業提供者は、小学校では2人ずつ、中学校では1人、選抜された。提供される授業についても、なるべく授業者同士で事前に教材研究ができるように考慮して推薦された。中学校の提供授業が理科だったことから、接続性を考えて小学校6年生の理科、加えて4年生国語が提供された。小学校2校では、授業者同士で教材研究について相談し合えるように、事前の打ち合わせの会を8月に実施した。ただし、2022年11月に新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴う学級閉鎖が生じたため、藤並小学校では準備されていた2つのうち1授業の提供となった。一方で、昨年度の実験参観とは異なり、直接教室で参観できるようになった。

2. 鳥屋城小学校でのIR研究授業の実施

鳥屋城小学校では、「自ら考える力の育成—読解力を高める指導の工夫」というテーマで今年から研究が行われている。全国学調の結果からも、図・表から情報を取り出すところに課題があったこと、指示が通らなかつたり、言葉で伝える力が弱いことがある等、国語に関わる読解力に課題があると考え、このテーマが設定された。2学期から大事にすることとして、問ひかけ、音読、言い換えで、子ども同士でつなぐ・言い換えること、語彙力の向上といったポイントを意識しているということであった。

鳥屋城小学校では、4年生の国語と6年生の理科の2つの授業を前半後半と2チームに分かれて参観した後、分析を行った結果は表2の通りである。

提供された2つの授業をもとに、学校の研究テーマである「自ら考える力の育成」に関連して、どのような場面が見られたのか、IRメンバーで付箋に書き起こし、時系列に整理した。それらの付箋をもとに、研究テーマに関わる成果と課題について分析を行った。課題と考えられるパターンは1つ見出された

表2 鳥屋城小学校での分析の結果（展望シート）

課題と考えられるパターン	課題が発見された授業場面
教師の出るタイミング	4年生：①兵十とごんの視点の変化 ②気持ちを発表する場面 6年生：観察後に見つけたことを発表する場面
課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言	
(短期的) 子どもに理由や説明をたくさん言わせる場面をつくる（言い換え） →つぶやきを価値づけて全体に問ひ返して子ども自身の問ひにする	(長期的) 子どもが子どもの発言を聞く必然性が生まれるような問ひ返し

2つの授業は、各教科の「見方・考え方」を意識した授業展開になっていた。協議会では、この2つの授業の共通点を挙げながら、2学期に大事にした視点の中でも、「問ひかけ」と「言い換え」という視点から授業を分析した。

ホスト校が課題として考えている言語面を鍛えるには「言い換え」がもっと子どもから出てくることが、子どもにもっと意見や考えを言わせることが重要ではないかという議論になった。また、「問ひかけ」も多様な意見が出るような「問ひ」を考える必要があるのではないかといったことや、深めどころがあり、焦点化できそうな「問ひ」であれば「言い換える」必然性が出てくるのではないか、という議論になった。加えて、子どものつぶやきは多く出ているのに、それが「問ひかけ」や「問ひ直し」、

「言い換え」に生かしきれていないのがもったいない、子どものつぶやきを拾い、価値づけて全体に共有されれば、もっと「問ひ」が深まるのではないかという意見も出された。

協議に参加したホスト校の九鬼教諭からは、学校全体の課題だと認識していたことが、改めて協議の中で出されたので、IRでの協議の結果を学校全体で再度話し合うきっかけにしたいと語られた。

3. 藤並小学校でのIR研究授業の実施

藤並小学校をホスト校とする授業研究では、4年生の国語と6年生の理科の授業の2つが提供される予定であったが、先述の通り感染症拡大の影響で4年生の国語の授業のみで分析することになった。IRメンバーによる参観の後、分析を行った結

果は表3の通りである。

ホスト校では、「伝えたい・比べたい・つなげた
い子の育成～国語科の見方・考え方を意識した学
習指導を軸に」というテーマをもって、昨年度から
校内研究に取り組んでいる。そのために、「見方・
考え方」を示しためあての設定と振り返り、子ども
の思考を促す構造的な板書、めあてにせまるよう
な発問や問い返しの研究の3点に重点的に取り組
むよう研究している。

IRメンバーによる協議では、子どもが自分の意
見を発表する(伝える)ことはできているという意
見がだされた。その一方で、子ども同士で「比べた
い」と思えるための手立てが弱かったのではない
かという話が議論の中心となった。教科書の記述
を根拠や理由にして発表できている児童を価値づ
けることはできていたが、深く考えさせたいポイ

ントについての発言に、問い返りするチャンスを
逃していたのではないかとことが話し合われた。

「課題が発見された授業場面」として挙げられた
のは、児童の発表に対して「逆に？」と教師が発話
している場面であり、それは教師が無意識的に「立
ち止まらせたい場面」だったから「逆に？」と発話
したのではないか、という議論になった。そこで意
識して問い返しやゆさぶりをすることが、子ども
同士で意見を比べることにつながるだろうという
分析がなされた。

また、「見方・考え方」という学習指導要領で提
示された観点は、思考を促すためのツールや視点
であるのに、ともするとその「見方・考え方」に着
目することが目的化してしまう傾向があることに
ついて、現職院生の現任校での経験から語られる
場面もあった。

表3 藤並小学校での分析の結果(展望シート)

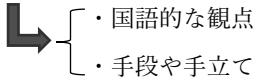
課題と考えられるパターン	課題が発見された授業場面
問い返しやゆさぶりをして立ち止まらせる場면을意識できていない	4年生:「逆に？」という言い方(14:10)
課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言	
(短期的) ・予想される発言をもとに、立ち止まるポイントを設定して問い返しの準備しておく。 ・根拠や理由を問い返す	(長期的) 「 <u>見方・考え方</u> 」の理解を深める  ・国語的な観点 ・手段や手立て



図1. 付箋に書き起こす作業の様子



図2. 授業者と管理職に分析結果の報告する様子

国語科の「言葉による見方・考え方を働かせる」とは「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」である。そのため、どの部分や関係に着目させれば、子ども同士で意見や考えを比べることができるのか（手段や手立て）、そのような比較を通して「言葉への自覚」を高められるようにすること（国語科としての観点）で、「伝えたい・比べたい」国語の授業になると、校内で理解を共有することが長期的な提言となった。

4. 石垣中学校での IR 研究授業の実施

石垣中学校をホスト校とする授業研究では、2年生の国語の授業が提供された。ホスト校で計画されていた校内授業研究に IR メンバーが参加する形で実施した。参観後、校内の授業研究とは別に会議室をお借りして分析を行った結果は表 4 の通りである。

ホスト校では、2016 年度から「学び合い」をキーワードに校内研究が進められており、「学び合う」学習活動によって、理解や認識が深まるような授業を目指してきた。そのため、本年度は「深い学びを実現する授業の創造～思考ツールを活用した学び合い活動の充実～」というテーマで校内研が進められている。提供された理科の授業では、生徒が 1 人 1 台タブレット端末を用いて Google Jamboard で共有された天気図を完成させ、フィッシュボーン図に書き込むグループワークが行われた。

IR メンバーによる協議では、「学び合い」、「思考ツール」、「深い学び」の 3 つのキーワードをもとに分析を行った。「学び合い」については、グループ活動を行っており、各自が作業をしながら「わからん」、「どうしたらいい？」等の気軽に確認し合える関係性ができていたことが挙げられたが、教え合うという姿が見られることが少なかったという指摘があった。また、班を超えての「学び合い」の機会が少なかったことも挙げられた。

表 4 石垣中学校での分析の結果（展望シート）

課題と考えられるパターン	課題が発見された授業場面
キーワード（風向、風力、等圧線）に注目しにくかった。	13:40 頃：着目できていない班への指示
課題の解決に対して我々の学びを前進させるための提言	
（短期的） 注目すべきポイントに気づかせるための <u>資料を比較</u> させる 具体→ 規則性	（長期的） 内容面での学び合いになるための 課題の設定（ <u>単元設計</u> ） どこで思考ツール、どこで学び合い、 どれが最適な思考ツールか

設定された授業のめあては、風向と風力の関係性を探すという展開での活動と一致していたが、キーワードに注目させるための手立てがもっとあればよかったという点が、課題として挙げられた。そのため、注目すべきポイントに気づかせるための具体的な資料を提示し、思考ツール等を活用して比較さ

せ、そこから規則性や一般性に気づかせることが、短期的に必要なではないかという提言になった。そして、授業内容に関して比較し合い、話し合あえるような課題を設定することやそのような単元を設計するで、「学び合い」の内実を充実させることが、長期的に必要なではないかという議論となった。

5. 協議結果の授業者の受け止め

実施した3回のIR授業研究では毎回、表2~4を示しながら授業者と管理職に協議した結果を報告する時間をとった。その後、授業者には質問紙に回答してもらった。

質問紙の質問(1)「分析された『課題と思われるパターン』は、日ごろの授業実践でも感じる課題でしたか?」について、4人の回答はすべて「まあまあ当てはまる」であった。また(2)「分析された『課題と思われるパターン』は、ご自身で解決できそうな課題でしたか?」については、4人中3人は「非常に当てはまる」、または「まあまあ当てはまる」と回答し、「どちらとも言えない」は1人であった。この設問で、「非常に当てはまる」と答えた2人は教職歴(講師経験含む)が3年目と7年目であり、他の2人が12年以上であることと比べると、比較的若手教員だともいえる。そのうちの1人は「自分の中にあった、本時の課題が明白になった。(何か足りないと感じていた)」と記述されていた。

質問(4)「提案された『短期的な』改善策は、今後の授業実践に有効な内容でしたか?」では、2人が「非常に当てはまる」、残り2人が「まあまあ当てはまる」と回答した。質問(5)「提案された『長期的な』改善策は、今後の授業実践に有効な内容でしたか?」では、1人が「非常に当てはまる」、残り3人が「まあまあ当てはまる」と回答している。IRで提案した「短期的」、「長期的」な改善策について、授業者は概ね有効だと思っていることがわかる。

自由記述では、「自分の授業と学校の教育目標がどれほど合っているかという点を普段以上に考えることができた」や、「今後の授業で切り返しを意識していきたい」、「日々の積み重ねだと思いますが、子どもにきく必要を与える問い返しが、むずかしいなどと思います。これらから工夫していきたいです。」といったコメントが見られ、IRによって協議され、報告された内容について授業者に伝わり、理解されて

いることがわかった。

おわりに

今回の調査では、協力校の中に初めて中学校の参加が実現した。加えてIRメンバーとして協力校の2小学校から参加してくれた2人は、すでにこの調査に参加して3年以上の経験者であり、分析や協議もスムーズに実施できた。授業提供者は小学校同士で事前の教材研究が2~3回程度実施された。その結果、ホスト校の研究動向や児童の実態を踏まえた分析をより行うことができたと考える。

その一方で、今回の調査では3校のうち2校で提供される授業が1つとなり、その1つの授業から学校の研究テーマに即した分析を行うことの難しさが改めて感じられた。授業者の力量ではなく、学校のもつ研究テーマに焦点化した分析にするために、協議の仕方により工夫が必要であり、この点は次回以降の課題となった。

また2022年度の学期末にIRチームのメンバーに再度聞き取り調査を実施する予定であり、校内研修等における調査結果の活用等について聞き取りを行い、本実践の成果と課題について検討していく。

(引用文献)

・廣瀬真琴・森久佳・宮橋小百合(2019) Instructional Roundsの日本における試行と評価, 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 第70巻, 249-261頁.

・宮橋小百合・川岸俊夫・安井健晃・九鬼正志・古川弘樹・服部真子・川口久仁・寺中誠(2021) 有田川町における学校循環型授業研究の推進, 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書, 2020, 196-201頁.

【注】本研究は、科学研究費助成事業基盤研究(C)「学校を超えて学び合う現職教育の組織化に関する研究」(20K02856)および「専門的な学習共同体のネットワーク化に関する実証的研究」(21K02241)の一環として実施した調査の一部である。